

草原の涼やかな風が眠る霊を慰めてくれるように

——歴史検証の旅に参加して——

下山田 誠子

「満州開拓団」のことは長らく心にかかっていたが、今回よい機会を頂いて参加できましたこと感謝いたします。

私と妹は当時の新京（現長春）に生まれ、敗戦後、平壤の難民収容所に暮らし、米国の船で佐世保に上陸したとのこと。3歳に満たない私にはほとんど記憶がなく、両親の元気な時に何も聞かなかったことが悔やまれてなりません。

祖父母のもとに送られた茶色に変色した写真には、みどりごの妹、淑子が母に抱かれ、幼い私が父母の間に座っている、この一葉があるだけです。父は根こそぎ動員で現地召集され、母と私たちは、ソ連参戦により逃避行を重ねて38度線を越えたようで、藤原ていさんの『流れる星は生きている』と同じような状況だったようです。

引き揚げ後も母は「淑子ちゃん淑子ちゃん」と、「今生きていれば今日は〇歳よ」と言っており、幼い私は「この私がいるのに・・・」などと思ったりしたのです。

ほんのわずかの髪の毛と、爪を切って襟に縫い込んで故郷の墓地に埋葬された、妹淑子ちゃん存在。この世に生きていたことすら、もう知る人もいなくなってしまうことが、あの広大な大地のどこかに小さな骨が眠っているのでしょうと心を安らかにすることにしました。

母は生前、「開拓団の方のご苦労はこんなものじゃなかったのよ」と言っておりました。それ以来、なぜか、私は開拓団の方々に負い目のような思いを抱いてきました。父は役所のどんな部署にいてどんな仕事をし、どこの戦地に行ったのか、何も知ろうとせず、封印して生きてきました。

孤児探しが始まり、新聞に顔写真付きの経歴が載るようになり、私は幼い子どもたちを寝かしつけてから深夜まで、その一人ひとりをじっと見つめたことを思い出します。「もしかして淑子ちゃんが生きて、助けられたかも・・・」と、あり得ない想像をしたりしたのです。肉親を失った悲しみに優劣などないのだ、と、最近思えるようになりました。

満蒙開拓青少年義勇軍、開拓団、国策として送られた方々、領土拡張の野望、「人民廃棄止むなし」と打電したのは誰なのか？ それを実行した人は誰なのか？ 土地も家も奪われ、苦力にさせられた方々への謝罪と補償はどうなのか？

悲しみを共有する私たちの課題は何だろうかと考えさせられております。

かつて今も、あの広大な蒙古の草原を吹きわたる涼やかな風があの地に眠る方々の霊を慰めてくださるように、あの地に働く方々の上に活力を与えてくださるように、と祈り願わずにはおられません。

（しもやまだ・せいこ：長野県松本市在住。日本友和会会員、NCC中国委員会委員。

*編集者注：友和会は国際的な非暴力キリスト教平和団体、NCCは日本キリスト教協議会のこと。このNCCより日本語教師として江西医科大学に派遣された経験をもつ）